

所 陵

ISSN-0913-1906

No. 31

関西大学博物館彙報

平成7年9月30日発行

[SENRYO・KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



眉庇付冑・桂甲及び装具の附装（奈良円照寺墓山1号墳出土品を基礎に復原）

目次

カザークの復活	2
近世山陵図抄（Ⅰ）	4
市立五條文化博物館	6
香港博物館	8
『文化財保護提要』の活用（その2）	10
平成6年度調査報告—北九州の遺跡と博物館	12
考古学入門講座（平成6年・第5回）	15
博物館開館一周年記念講演会	15
博物館実習「洋上実習」報告	16
平成6年度受贈図書一覧	17
平成6年度収集資料	20
編集後記	20

関西大学博物館

〒564 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

TEL 06-368-1171（直通）

FAX 06-388-9928

カザークの復活

中村仁志

カザークなる人びとは、わが国では通常コサックという名前と呼ばれている。研究者の間でも専門性の高い論稿の中ではカザーク、一般の読者を対象とした場合にはコサックというように使い分けがなされることが多いようである。

彼らカザークは、その多くがロシア語を話し、ロシア正教を信仰していたことからうかがえるように、ロシア出身者を中心とする人間集団であった。ロシアの中央部において農奴制が成立、強化されつつあった15～16世紀に南部の辺境へと多くの農民が逃亡した。このロシア人農民と辺境の非ロシア系諸民族が混雑して生まれたのがカザークである。

カザーク集団は、言語、宗教の面ではロシアとのつながりを保ちつつ、政治的にはロシア国家の支配からは一定の距離をおき、辺境における半独立勢力という趣をもっていた。その際、カザークが形成した組織が「軍団」であり、たとえばドン河の流域に住みついたカザークはドン・カザーク軍団、ヤイク河の流域に住みついたものはヤイク・カザーク軍団と呼ばれた。この「軍団」の名称から明らかなように、カザークの集団としての特性は何よりもまず戦士の共同体であることに求められた。と同時に軍団はカザークの政治、経済的な組織でもあり、カザークの社会生活全般を律する機能をもっていたのである。

戦士集団としてのカザーク軍団は、成立後しばらくの間は、周辺の異民族と戦う一方で、自分たちを支配下におこうとするロシア政府の試みに対しカザークの自治を守るべく抵抗した。だが、時代が下るにつれ、ロシアの皇帝（ツァーリ）との結びつきを強めたカザーク軍団は、ロシア国家の軍事組織の一つへと変わっていく。その結果、カザークは帝政ロシアがおこなった数々の戦争に従軍し、領土拡大の先兵をつとめるようになった。また、ロシア帝国内においては、カザークは皇太子を全カザーク軍団の隊長（アタマン）として戴く特権的な身分となり、皇帝の親兵をもって認めるようになった。これ

が、さまざまな歴史的変遷を経たすえに帝政期の末にカザークがたどりついた姿である。

ところが、ロシア革命を経てソ連が成立するとカザークをとりまく状況は一変する。内戦の渦中、そしてボリシェヴィキ（共産党）が内戦の勝利者となるとともに、反革命の側についたとみなされたカザークの多くは処刑されるか国外への亡命をよぎなくされ、1920年にはカザークという身分そのものが廃止された。また、歴史資料館や博物館では、帝政期にカザークが従軍した戦役においてあげた武勲を示す記念品や武器などの展示品が廃棄された。皇帝の戦士としてのカザークの歴史の抹消である。

とはいえ、ソ連期にあってもカザークの過去一切が否定されたわけではない。カザーク史のある側面については、ソ連邦の公式の歴史観に沿うものとして肯定的な評価が与えられた。そうしたカザーク評価のさいたるものが、17～18世紀に発生した大規模な民衆蜂起においてカザークが果たした主導的な役割に対する評価であった。たとえば、わが国ではステンカ・ラージンの乱として知られている蜂起であるが、これはソ連では1670～71年の農民戦争と呼ばれ、反乱の指導者であったラージンをはじめとするドン・カザークたちがいかなる事情で蜂起にふみきるにいたったのか、また反乱の過程でどのような行動をとったのかについて多くの史料が収集され、研究成果が発表された。

こうした民衆反乱へのカザークの参与は、帝政期の末にあってはカザーク史における汚点とみなされてきた。それが、ソ連期には一転して、これこそが記録に価するカザーク史の一頁とみなされるようになったのである。かくして、ソ連の歴史資料館や博物館においては、ラージンの乱やそれと双璧をなすとされる18世紀のプガチョフの乱（1773～75年の農民戦争）に参加したカザークたちが用いた武器や反乱への参加を呼びかけるべく出した激文などが、カザーク史関係の展示品の主座を占めるようになった。

ところが、ペレストロイカからクーデター事

件を経てソ連崩壊という時代の巨大なうねりのなかでカザークの運命は、またしても大きな転機を迎える。しかも、それは歴史書や博物館においていかなるカザーク像が提示されるのかという問題にとどまらず、いったん消滅したカザーク軍団の復活という事態となってあらわれたのである。

カザーク復活のきっかけとなったのは、旧ソ連の末期に当局のイニシアティブによってもうけられたアンサンブルと呼ばれるカザークの民族舞踊団であった。世界的な名声をもつカザーク・ダンスや合唱のための団体である。はじめは文化活動を営む集団として組織されたカザークは、その後、ソ連崩壊前後の社会的混乱のなかで、しだいに政治色を強め、独自の発展をとげていった。1990年にドン・カザークの団体が結成されたのをはじめとして、旧カザーク軍団の所在地において続々とカザーク軍団が再結成され、カザークの血を引くと考える人々が軍服を身にまとい、戦士としてのアイデンティティをふたたび主張するようになったのである。

さらに、こうした動きを是認するかのごとく出されたのが、ロシアのエリツィン大統領による二通の大統領令である。その一つは1992年7月16日付けの大統領令で、この中でコサックはロシア内に住む民族の一つと規定され、民族としての基本的権利を認められていた。これは、ある意味では驚くべき規定であった。というのも帝政ロシアにあってはカザークはあくまで身分であって、その中にロシア人やカルムイク人

といった民族の別があったのであり、ソ連期においてもソ連内に居住するとされた百数十にものぼる民族の中にカザークの名前はなかったからである。つづいて出されたのが1993年3月15日付けの大統領令であり、ここにはカザーク部隊を編成し、民族紛争にゆれる国境地帯の警備にあたらせるとの内容がもりこまれていた。

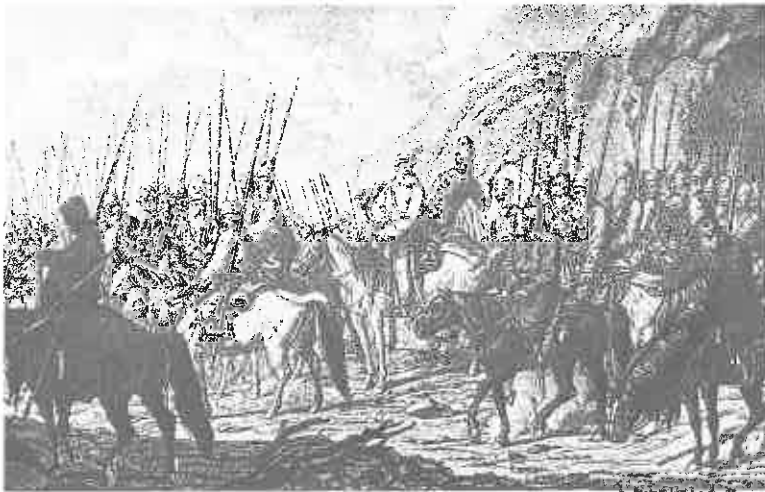
カザークは、これらの大統領令を自分たちの行動を追認したものとうけとり、復活運動をさらにすすめていった。このあたりの事情についてはわが国でも各種のマスメディアを通じて報道されているが、その中の一つとして1994年8月19日にNHKスペシャルで「よみがえるコサック〜ロシア大国主義の先兵たち〜」というテレビ番組が放送された。

復活したカザークは、はたしてこの番組の副題のごとく「ロシア大国主義の先兵たち」になるのだろうか、それとも成立当初のカザーク軍団がそうであったように、中央政府から一定の拒離をおいた半独立勢力となる道を歩もうとするのか。いずれにせよ彼らの進路は、ゆれ動く現代のロシアの政治、社会状況のなかでカザークが集団としての自分たちのアイデンティティを何に求めるかによって方向づけられていくであろう。そしてそれはまた、彼らが自分たちの歴史のどの部分に光をあてようとするのかという点と深くかかわる問題なのである。

＜参考文献＞

阿部重雄『コサック』教育社、1981年。

酒井裕『コサックの旅路』朝日新聞社、1994年。



18世紀末のウラル・カザーク（もとのヤイク・カザーク）

近世山陵図抄 (I)

網 干 善 教

江戸中期から幕末にかけて史跡をめぐる旅が流行し、同時に皇陵墓の見聞記や絵図の書写が行われた。ただ、描写された皇陵墓と現在宮内庁治定の皇陵墓の間に相違するものもあるが、その真偽は別として、記録や絵図から、それらの古墳の当時の様相を知るという意味で資料的価値はある。

関西大学文学部考古学研究室にも『大和國山陵圖』と題する皇陵絵図がある。これは写本と思われるが「第一代神武天皇」からはじまって、「第九十五代後醍醐天皇」及び「未考」4基と「奈保山御陵碑考證」(元明陵函石)に至る彩色の絵図が収められている。ここではそのうちの若干を抄出して紹介したい。

〔第六代 孝安天皇〕の陵として描かれているものは、現在、御所市所在の史跡宮山古墳(室大墓)である。その特徴は東に「八幡」「拝殿」があり、西向きの方後円墳で、後円部の墳頂に方形の垣牆が周らされ、その中央に方形の石状のものがある。これは恐らく現在、後円部頂上北側に露出する石材であろうか。「山頂上平、東西十六間(28.8m)、南北十八間(32.7m)」とある。そして後円部の高さは「山高9間1尺5寸(11.4m)」とある。地籍については「大和國葛上郡室村、高八百八石四斗二、御領私領入組」

と記す。なお、注目すべきものに、この古墳の後円部墳上近くに溝がめぐっていたらしい。絵図に「此堀切廻五十一間、幅一間、又二間深サ二尺ヨリ五尺」とある。現状ではこの溝状のものはみられないが、墳頂部の南側でやや段状になった部分がある。

以上の如く、宮山古墳(室大墓)にはかつて孝安天皇陵の伝承のあったことを知る。^①



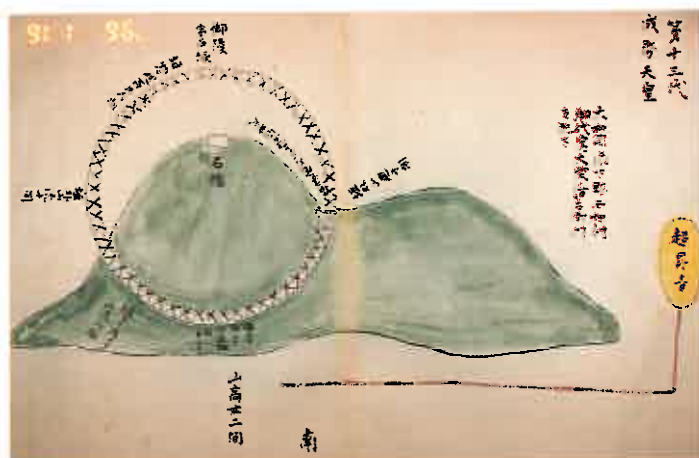
仲哀陵として描かれた神功陵

〔第十代 仲哀天皇〕として絵図には「神功皇后御陵」の図を挙げている。そして地籍は「大和國添下郡超昇寺村」とあるから、現在、宮内庁治定の奈良市山陵町字宮ノ谷の「神功皇后狭城盾列池上陵」を指すものと思われる。絵図には北側に後円部が描かれ、墳頂を囲んで垣をめぐらし、鳥居を建て北側に石燈籠を置き「本ノママ 神功皇后御陵」と記している。南側の山状の絵は前方部を表わすものであろう。そして前方部の南側と東西両側に周濠が描かれている。また、西側の周濠内には「島」とあるとされる。

注目すべきは後円部頂で鳥居を配した円形の垣牆内に、長方形のものが主軸にそって3ヶ所描かれ、「石棺九尺(約2.73m)」「横三尺(約0.91m)」と注記されている。これは石棺が3基並んでいるのだろうか、それとも天井石、



孝安陵として記載された室大墓



成務陵として描かれた古墳

若しくは蓋、身のようなものの存在を示しているのだろうか。

〔第十三代 成務天皇〕として「大和國添下郡西畑村、御代官大柴清右衛門支配下」「御陵高石塚」が描かれているのは現在治定の「成務天皇狭城盾列池後陵」であろうか。ただ絵図に「超昇寺」とあり、茶色の線で曲尺のように直角に曲る道路を示す線がある。『聖跡圖志』^②の「添下郡佐貴郷諸陵図」によると超昇寺から南に向って道路があり、途中西に折れて、西畑村に至る。その十字の交叉点に「弘法井」「二条茶店」とあるから、成務陵までの間にかなりの距離がある。その間に「山上村」があるから位置的に疑問はある。

それはともかく、この陵は明確に前方後円墳



額宗陵として描かれた平野塚穴山古墳

として描かれ、後円部頂上に「石棺」が記されている。若し成務陵であるとする『扶桑略記』の康平6年(1063)5月13日条に「発遣山陵使。是依去三月盗人撥池後山陵(成務)掠奪寶物也。」とするのに該当するであろう。なお『皇陵史稿』によると弘化元年(1844)9月に再度盗掘にあった際石棺の蓋石に亀甲文のあったことを指摘しているという。^④そうするとこの石棺は組合せ式長持形石棺で、大阪津堂城山古墳や奈良御所宮山古墳の石棺と同様に蓋石に彫刻のあることを示唆する。

〔第廿四代 顕宗天皇〕とする山陵絵図には「大和國葛下郡平野村、本田能登守領地」と記し、「御陵字石上」とする。絵図及び注記からみると、これは現在、香芝市平野にある塚穴山古墳である。

・「奥行一丈五尺(4.5m)、幅四尺八寸(1.45m)、高五尺七寸(1.73m)、石厚二尺五寸(0.76m)、蓋石厚三尺(約0.91m)」とある。発掘調査報告書の計測値は石櫛全長4.47m、玄室幅1.5m、高さ1.762mとあるから、この寸法に近い。

顕宗陵を平野塚穴山古墳と想定した記述は元禄12年(1699)刊の『山陵絵圖』や明治26年(1893)刊の野淵竜潜『大和國古墳取調書』その他、『陵之記』(年代不詳)などにもみられる。(未完)

(註)① 秋山日出雄、網干善教『室大墓』奈良県史跡天然記念物調査報告第18輯、昭和34年

② 津久井清彰『聖跡圖跡』嘉永7年(安政元年)、遠藤鎮雄訳編『史料天皇陵』昭和49年

③ 藤井利章『天皇陵と御陵を知る事典』平成2年

④ 奈良県立橿原考古学研究所編『竜田御坊古墳、付平野塚穴山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第32冊、昭和52年

『市立五條文化博物館オープン』

小 島 卓

去る4月29日、奈良県五條市に新しく市立五條文化博物館がオープンした。

この博物館は五條市の北部北山町にあり、世界的建築家、安藤忠雄氏の設計による建物で、3階建ての最上階のみが山の斜面から突き出た格好の、円筒形をしたユニークな外観を呈している。

奈良県では考古系の博物館・資料館は今まで存在していたが、考古・歴史・民俗等を扱った歴史系総合博物館としては五條文化博物館が県下初であり、五條の歴史や文化財、さらには五條で育まれた優れた文化を内外にアピールするための、情報発信基地としての役割を期待されている。

五條市は、奈良県と和歌山県・大阪府が境を接する地域に位置し、東西を吉野川が流れ南北を山に挟まれた交通の要衝である。

市内から発見されている考古遺物から、この地には約6500年前の縄文時代から人間が生活していたことが窺われ、奈良時代に至っては国宝栄山寺八角円堂が、平城京から最も南にある天平建築であり、かつては藤原南家の氏寺であったごとく、古代においては当時の中央政府と深い繋がりを持つ土地であった。そして中世では、背後に吉野をひかえる地理的性格から、南朝に属して功績を残す武士の活躍が見られ、栄山寺

は長慶天皇の行宮になっていた。

近世に入ると、五條には幕府の代官所が設置された他、交通の要衝として大いに発展し、金融業を始めとする各種の商業が盛んに営まれるなど、周辺地域の政治・経済の中心地として町場が形成されており、その町場の姿は今日でも保存されている。幕末には天誅組の変の舞台となり、明治以降は南和広域圏の中核としての機能を担っている。

以上、数千年に渡る五條の歴史を博物館では通史的に紹介している。博物館の入り口は3階にあり、エントランスホールには博物館のシンボリックな展示として栄山寺八角円堂の内陣装飾画を5面マルチ映像で紹介している。

この装飾画は、造東大寺司系の画工が製作に関わったと考えられるもので、正倉院御物に描かれた文様や敦煌莫高窟の絵画との間にも共通性が見られ、天平美術の国際性の一端を見ることができる。

階段を2階に下りた所から通史展示が始まる。「五條文化の始まり」コーナーでは縄文・弥生時代の遺跡から出土した遺物の中で、当時から人々が吉野川を利用した交易を行っていたことを物語る資料を展示し、五條文化黎明期の人々の暮らしを紹介している。

続いて「五條の古墳時代」コーナーでは、猫



博物館外観



展示場

塚古墳出土の蒙古鉢形冑を始め、当時の五條が鉄器生産の拠点であったことを示す、市内の古墳から出土した遺物を展示している。

なお猫塚古墳は、網干善教先生が昭和33年に発掘調査された古墳である。

奈良時代を扱う「都と五條」コーナーでは、五條と藤原京や平城京の中央政府との深い繋がりを紹介している。まず五條市域で盛んに行われていた瓦生産に関わる資料を展示しているが、ここに展示している古瓦類は、藤原宮や飛鳥の寺跡で出土した瓦と同范であり、当時の五條が前代の鉄器生産に続いて瓦生産の拠点であったことを示している。さらに栄山寺に伝わる古文書類を使って、当時の条里制や藤原氏の権勢を背景とした栄山寺の隆盛を紹介し、最後に五條特有の御霊信仰にも触れている。

「五條地域の荘園と武士」コーナーは、鎌倉時代から戦国時代までのコーナーで、地侍の活躍を伝える資料として在地武士二見氏宛の長慶天皇綸旨などを展示している。

このように博物館の展示は時代ごとにコーナー分けをしてあるが、コーナーを仕切る壁の様なものは無く、展示スペースは吹き抜けを伴う開放的な空間の中に演出されている。

1階展示室は、床から天井までの吹き抜けになっており、「近世の五條」では近世の五條の町の賑わいを紹介している。ここでは旧家に残る近世文書や商家の民具を展示している他、ファンタビューと呼ばれる特殊映像装置を使い、当時の賑わいを再現する試みがなされており、来館者にも好評の展示である。

「近代への胎動」のコーナーでは五條の文化水準の高さを象徴する、五條が生んだ幕末の儒学者であり、勤皇の志士達の思想的指導者である森田節斎を紹介する展示や、天誅組の遺品、明治初期に極めて短期間に設置された五條県の実在を示す、同県の署名がある高札や文書が展示してある。

最後に「吉野川そして五條の変遷」として、吉野川にまつわる古い写真を展示し、川と人との関わりをもう一度考えることとして、通史展示を締めくくっている。

こうした通史展示の他、スポット展示として「五條の仏教美術」では、市内に点在する平安・鎌倉の仏像等、五條の仏教文化を、「五條の金石

文」では史跡宇智川の磨崖碑等の金石文を展示し、国宝栄山寺梵鐘についてはその技法を含めて優れた点を紹介している。

「万葉の五條」では五條で詠まれた『万葉集』の歌を紹介し、「祭りと行事」では、奈良県指定無形民俗文化財でもある陀々堂の鬼はしりや、市内で今も行われているお仮屋儀礼など、民間に伝わる民俗文化を映像も交えて紹介している。

こうした展示の他、五條の文化財や自然を紹介する立体映像や、部屋の温度を変化させることによってさまざまな地球環境を来館者に体感させ、人類創世以来の人間の営みを紹介する疑似体験映像も毎日上映されている。

以上のような展示内容で五條文化博物館は開館した。今後、特別展・シンポジウム・博物館講座等の企画を通して、より市民に開かれた、市民が参加できる博物館を目指し、ハード・ソフト両面で充実していくことが求められる。五條市には郷土の歴史を学び、優れた文化財を後世に伝えていこうと努力されている人々の活動が盛んで、こうした諸団体との連携から町づくりに貢献し、市民とともに発展していくことが課題である。

これからは五條市のような地方市町村レベルでの博物館が多く誕生していくと考えられるが、こうした地域住民との距離が近い博物館の運営において、五條文化博物館は一つの試みとなる役目を負うことになるだろう。



展示場

香港博物館

松 浦 章

I

香港（ホンコン）は現代の多くの日本人にとって買物旅行の重要な目的地の一つに過ぎないが、中国の近現代史を研究する者からすれば重要な地であることは言うまでもない。とりわけ、現代の中国研究者にとり香港は中国の動向を知る上での重要な情報源であって、今日もそれに変わりはない。しかし、香港そのものの歴史を正當に取り扱われることはそれほど多くは無かった。その香港の歴史を映像資料等を使用して、また都市の商店の一部等を再現して見せてくれる博物館がある。それが、香港博物館である。

香港博物館は香港・九龍尖沙咀海防道九龍公園にある。香港島と九龍を結ぶスターフェリーの九龍側埠頭から少し北にあり、香港の九龍側の繁華街で有名な彌敦道（ネーザン道路）の西側にある九龍公園内にある。見物しやすい場所にあるが、日本人観光客が訪れることは少ないようである。

II

香港は面積は1070平方 km で、香港島を含め236の島と九龍半島とその北に続く新界からなる領土によって構成され、英語と広東語が公用語である。気候は亜熱帯性気候で、人口は約600万人で、外国人の在住者も多く1993年4月現在でフィリピン人9万7千人、アメリカ人2万6千人、イギリス人2万1千人、タイ人1万9千人、インド人1万9千人、カナダ人1万9千人、



①香港博物館

オーストラリア人1万6千人、日本人1万4千人、マレーシア人1万3千人もの人が居住していると言われる（『香港；Hong Kong Now！』1995年4月号、アジア・ビジネス・プレス・ホンコン・リミテッド）。

香港島は中国の清代にあっては幾つかの漁村があるに過ぎない地であったが、1840年に起こったアヘン戦争後に清朝とイギリスの間で締結された1842年の南京条約によって、清朝からイギリスに割譲された。その後、1856年に発生したアロー号事件を契機に起こったアロー戦争、第2次アヘン戦争後の1860年の天津条約によって、香港島に接する九龍半島がイギリスへ割譲された。九龍半島の北側の地、新界はイギリスが香港防衛を口実に1898年に清朝政府より99年間の期限をもって租借したものである。その期限が1997年に迫っているのである。

III

香港博物館は金曜日が休館日で、平日は午前10時から午後6時まで、日曜日と香港の祭日は午後1時から午後6時まで開館している。入館料は大人が10香港ドル（約120円）、児童、学生と60才以上の方は5香港ドルと廉価である。常設展示として香港の歴史が概観できる「香港故事」を行っている。全て九つのコーナーに分けて香港の先史時代から現代までの歴史を知ることができる。

第一展示は「自然環境」である。ここでは香港の気候、地質、地形等から香港に生息する動物、植物等を紹介している。

第二展示は「早期居民」である。香港で発見された先史時代からの考古学的遺物が展示されている。

第三展示は、「農村」である。ここでは主に九龍の北に位置する農村を中心に、農村での人々の生活習慣や風俗、信仰に関する展示を行っている。

第四展示は、「城市」である。展示内容の時期



②香港博物館、商店の再現

は1841-1851年の10年間であって、アヘン戦争後の10年間における自由貿易港としての早期の香港の状況についての展示である。

第五展示も「城市」であるが、1852-1862年迄の香港の発展であるが、この時期には香港島に加え九龍がイギリスに割譲され、領域が拡大発展していく地域における人々の信仰の対象であった廟や苦力貿易や、南北行と言われる各地の物産を扱う商店などに関する展示がある。

第六展示も「城市」であり、1863-1893年の30年間における香港の貿易の発展を中心に、海運業、通信業、銀行業務や工業の進展の状況を表示しているが、さらに大陸からの移民による人口増加によって発生する様々な社会問題に対応する一面として、東華医院や保良局と言われる香港居住の人々の厚生面を保護する機関が設立されたことに関する展示である。

第七展示も「城市」であり、展示内容は1894-1941年までの期間である。この時期に新界が租借されその領域は拡大した。中国では1911年に起こった辛亥革命の影響が、香港の中国人社会にも思想面や生活面でも影響を及ぼした。また交通、教育、軽工業の分野でもさらなる発展があったことを展示している。

第八展示は「日治時期」である。1941-1945年



④ヴィクトリアピークから見た九龍（手前は香港島）



③19世紀末の香港（香港博物館の再現壁画）

の時期に、アジア・太平洋戦争の間に日本軍が香港を占領し、香港住民が日本軍の統治下におかれた三年八ヶ月間の軍政下の香港住民の生活等の状況についての展示である。展示されている期間としては最も短い時期を扱った内容であるが、それだけに香港の人々にとって今でも大きな傷として残っていることは紛れもない事実であることを痛感させられる。

第九展示は「当代香港」は1945年以降の現代の香港の発展ぶりをつぶさに展示している。とりわけ世界経済の中で占める香港の役割、世界有数の金融センターである香港を経済、社会、政治、文化の面から国際都市としての香港を誇示する展示である。（以上、香港博物館「香港故事 The Story of Hong Kong」1994年1月参照）

IV

今日、人工衛星によって全世界のニュースが同時にテレビ等を通じて知られる情報のポードレス時代になったが、つい最近まで中華人民共和国の政治等のニュースは香港から一早く世界に伝えられるなど、チャイナ・ウォッチャーにとって香港は重要な都市であり、現在もそれには変わりはない。しかし、1840年に起こったアヘン戦争以降において、地域的には小さい香港が、世界史上に占める役割は決して小さいものではないことを香港博物館の「香港故事」は如実に示してくれる。

なお香港博物館は『香港歴史資料文集 Collected Essays on Various Historical Materials for Hong Kong Studies』香港博物館編製、香港市政局出版、1990年10月）等、多くの出版物を刊行しており香港史、中国近現代史研究に貴重な資料を提供しているが、日本では入手しづらい。

『文化財保護提要』の活用 — その2 —

角 田 芳 昭

「埋蔵文化財」のうち「出土文化財取扱要領」の第7項は、国が保有した出土文化財について、地方公共団体、博物館、歴史民俗資料館、大学その他当該出土文化財の保存、活用を行うに適したもののから貸付けを受けたい旨申し出があった場合は、法の定めるところにより、貸付けを行なう。とあり、保存・活用にとって適切であり、保管、展示等を適切に行うための施設、設備が整備され、文化財が適切な知識、技能をもつ者により取扱われることなどを条件としている。

次に「記念物」として「特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準」の規程がある。史跡、特別史跡、名勝、特別名勝、天然記念物、特別天然記念物の項目としている。

「史跡」はわが国の歴史の正しい理解のために欠くことができず、且つ、その遺跡の規模、遺構、出土遺物等において、学術上価値のあるもので、主なものを列記すると、貝塚、住居跡、古墳、都城跡、宮跡、城跡、古戦場、社寺跡、経塚、聖廟、藩学、私塾、薬園跡、関跡、一里塚、条理制跡、窯跡、墳墓並びに碑、旧宅、井泉、外国及び外国人に関する遺跡などである。

「特別史跡」は史跡のうち学術上の価値が特に高く、わが国文化の象徴たるものである。

「名勝」はわが国のすぐれた国土美として欠くことのできないものであって、その自然的なものにおいては、風致景観の優秀なもの、名所のあるいは学術的価値の高いもの、また人文的なものにおいては、芸術的あるいは学術的価値の高いものと規定している。主な項目では公園、庭園、橋梁、花樹、花草、紅葉、緑樹などの叢生する場所、鳥獣、魚虫などの棲息する場所、岩石、洞穴、峡谷、湖沼、砂丘、火山、温泉、山岳、丘陵、河川、展望地点などである。「特別名勝」は名勝のうち価値が特に高いものである。

「天然記念物」とは動物、植物及び地質鉱物のうち学術上貴重で、わが国の自然を記念するものである。「特別天然記念物」は天然記念物のうち世界的に又は国家的に価値が特に高いもので

ある。これらが指定され標識を設置する場合は石造とすることが原則で、特別の事情のある場合は金属、コンクリート、木材その他石材以外の材料をもって設置することを妨げない。これには名称、文部省の文字、指定年月日、建設年月日を彫り、あるいは記載しなければならないと規定されている。

続いて「伝統的建造物群保存地区」の法令があり、選定基準、台帳規則、条例の制定、制度の実施、これらの固定資産税の非課税措置、市町村保存地区保存条例等の規定がある。

続いて「銃砲刀剣類所持等取締法」があり、その第3章に古式銃及び刀剣類の登録並びに刀剣類の製作の承認の項目があり、登録を義務付けている。また22条において、「何人も、業務その他の正当な理由による場合を除いては、総理府令で定めるところにより計った刃体の長さが6センチメートルをこえる刃物を携帯してはならない」と規定している。また登録規則もあり、登録申請書、原票、登録証、所有者変更届出書、保管委託届出書、等の様式見本がある。「文化財保存事業費及び整備関係補助金交付願」の記載様式が収録されている。

高松塚古墳で壁画が発見されて以来、史跡及び古都保存整備の必要が叫ばれ、昭和56年5月26日法律第60号として「明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境の整備等に関する特別措置法」成立交付された。これを例として古都保存法が各地の史跡に適用されるようになった。続いて「博物館法」が収録されている。博物館法は総則、登録、公立博物館、私立博物館、雑則より制定されており、第1章に目的、定義、博物館の事業、館長学芸員等の職員、学芸員の資格、第2章に登録、申請、審査、第3章に公立博物館の所管、博物館協議会、入館料、補助金、博物館に相当する施設、等の規定があり、続いて博物館法施行規則がある。

第1章には大学において修得すべき博物館に関する科目の単位

第2章には学芸員の資格規定、第3章には博物館に相当する施設の指定、第4章は雑則であり、第1条に博物館に関する5科目が列記されている。第3条に資格認定として、試験認定と無試験があり、この結果、同等以上の者と認められたものは合格者とする。と規定している。第4条には、第3条の資格認定を毎年1回行なうと規定しており、官報で告示する。第5条は受験資格を規定している。第6条は試験認定の方法及び試験科目であり、第7条は6条については大学及び講習等で合格した科目は申請により免除されるとしている。第8条は2回以上何回でも受験できると規定している。第9、10、11条は無試験認定で学識経験のあるものは申請により合格者とされる。第12条は試験認定合格者、第13条は無試験合格者、第14条は合格証書、第15条は合格証明書の交付、第16条は手数料の規程である。

第3章は「博物館に相当する施設の指定」で第18条は申請の手続、第19条指定要件の審査である。第24条は指定の取消で要件を欠くときは、指定を取り消すとする。別記において受験願書、合格証書、証明書、相当施設指定申請書の様式が記されている。続いて環境庁の「自然公園法」がある。続いて「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」が収録されている。また続いて「森林法(抄)」通産省の「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」が収録されており、その目的として、この法律は、一定の地域で主として伝統的な技術又は技法等を用いて製造される伝統的工芸品が民衆の生活の中ではなくまれ受け継がれて来たこと及び将来もそれが存在し続ける基盤があることにかんがみ、このような伝統的工芸品の産業の振興を図り、もって国民の生活に豊かさと潤いを与えるとともに、地域経済の発展に寄与し、国民経済の健全な発展に資することを目的とする、とある。第2条はその指定等で条件に合ったものは指定するとし、諸々の条件がある。第3条は基本方針、第4条振興計画等々である。また建設省関係の都市計画法(抄)などがある。「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」もあり、その目的とするところはわが国固有の文化的資産として国民がひとしくその恩沢を享受し、後代の国民に継承されるべき古都における歴史的風土を

保存するために国等において講ずべき特別の措置を定め、もって国土愛の高揚に資するとともに、ひろく文化の向上発展に寄与することを目的とする、とある。定義については「古都」とはわが国往時の政治、文化の中心等として歴史上重要な地位を有する京都市、奈良市、鎌倉市及び政令で定めるその他の市町村をいう、とある。

『文化財保護提要』は2分冊になっており、2巻目は判例・資料編とになっている。これは文化財に対して事件の判例で指定・解除、現状変更、管理、譲渡・引渡、強制執行、埋蔵文化財、刑事事件、銃砲・刀剣類、条件・資料編である。主な文化財関係の訴訟事件を収録しており、事件の概要、判決のポイント、判決文が収録されている。1例として「四季の花」指定確認請求事件というものが収録されている。これは所有者が狩野探泉作の絵画「四季の花」について重要文化財に指定してくれるよう申請したが、文部大臣はこれを拒否した。そこで所有者から文部大臣に対し、重要文化財に指定されるべきものであることの確認を求めて訴えた。昭和49年5月29日一審判決があり、指定確認について東京地裁は「本件訴えを却下する」とあり、控訴し二審の東京高裁も同様の判決があり、さらに上告したが、三審の最高裁もこれを棄却する(昭和50年6月)旨の判決が下された。判決のポイントは文化財的価値について判断を求めることは、法律上の争訟に当たらない。また重要文化財の指定を求める申請権は存在しないから、申請を拒否する行政庁の行為を抗告訴訟の対象とすることはできない、としている。続いて再度昭和58年3月、前記狩野探泉画4枚(四季の花)について重要文化財に指定してほしいと文部大臣に要求し、その回答を求めたが裁判所は、このような訴えは不適法であるとして、これを却下した。この件に関し昭和59年5月広島県の三浦氏は、その所有する絵画「四季の花画」(14代将軍家茂御用絵師探原守経の作と称する)を重要文化財に指定すべきであると考え、広島県佐伯郡沖美町教育委員会を経由して文部大臣に申請書を提出した。文部大臣は昭和46年8月16日広島県教育委員会を経由して指定拒否の旨を回答した。この回答を出すにあたって、文部大臣は文化財保護審議会に諮問していなかった。(以下次号)

平成6年度調査報告

——北九州の遺跡と博物館——

博物館所蔵資料について毎年その出土地の確認、写真撮影、資料収集などの調査を行ってきたが、平成6年度は北九州地方の遺跡の調査及び博物館施設を見学したので、ここに報告しておきたい。

本学所蔵資料出土地としては筑後国三井郡立石村吹上（旧地名・以下同）の弥生土器、筑後国高良山出土の縄文石器、筑後国八女郡人形原出土の石人、石鞆、豊後国京都郡稗田村出土の管玉、小玉などである。文学部網干善教教授（博物館長）が同行し指導して下さった。

10月14日早朝J R京都駅を出発し11時50分小倉駅に着く。藤丸詔八郎氏（北九州市立考古博物館長）、前田義人氏（北九州埋蔵文化センター主査）、宇野慎敏氏（北九州埋蔵文化財センター学芸員）の出迎えを受け、北九州市立考古博物館へ向う。博物館と埋蔵文化財センターとが同居しており、発掘調査された資料がすぐに展示できる利点がある。図録等の寄贈を受け早速前田、宇野両氏のご案内で遺跡の見学に出かける。最初に河内王の陵墓参考地と指定されている「勾金陵墓参考地」（田川郡香春町鏡山）を見学する。河内王は朱鳥元年（686）新羅客の金智祥の饗応接待役として筑後に下り、持統3年（689）大宰師となった。鏡山の地へ葬る時に手持女王の作った萬葉歌に、「大君の和魂あへや豊国の鏡の山を富と定むる」とあり、これを信ずればこの地へ葬られたものと推定される。近くに鏡山神社があり陵墓の位置としては最適のようである。続いて「石塚山古墳」を見学する。この古墳は京都郡苅田町南原に所在し、ゆるやかな傾斜地に前方部を東南に向けて築かれた3段築成の前方後円墳で、復原全長120m、後円部径70m、前方部幅60mである。寛政8年（1796）後円部にある竪穴石室が発見され、石室内から鏡14枚、鉄剣、鉄鉾、鉄鏃などが出土したと伝えられている。現存するものは三角縁四神四獣鏡3枚、三角縁獣文帯三神三獣鏡3枚、三角縁六神四獣鏡1枚、素環頭太刀、銅鏃などであり、

鏡は全て舶載鏡で他の古墳に同範鏡がみられる。昭和62年の再調査で勾玉、管玉、小札、鉄鏃、土師器などが検出され、東北九州では最古の示準的な古墳といわれており、学術的に非常に貴重な古墳である。次に「御所山古墳」を見学した。石塚山古墳の南方2キロメートルに所在し、前方部を北に向けた前方後円墳である。横穴式石室で、石室内全面に赤色顔料で塗布され石障をめぐらしている。勾玉、囊玉、管玉、ガラス玉、鏡、鉄鏃、辻金具、鉄片、土師器などが副葬品として発見された。5世紀中葉から5世紀後半の古墳と考えられる。次に綾塚、橘塚古墳を見学する。「綾塚古墳」は京都郡勝山町中黒田にあり、丘陵端部に位置する円墳で、二段築成である。横穴式石室は南面する両袖型玄門付複室構造を示し、全長約19.4mの長大である。後室長さ3.3m、幅3.5m、高さ約3.7m、前室長さ2.2m、幅2.3m、高さ3.7m、羨道長さ約11m、幅2.3m、高さ2.4mである。後室平面型は正方形に近く、前室幅と羨道奥幅は同じで、複室構造としては退化現象を示している。巨石古墳に属する。後室奥壁に平行して石形石棺が安置されており、7世紀前半に位置づけられると推定される。昭和48（1973）年国指定史跡とされた。「橘塚古墳」は勝山町上黒田の平地に立地する円墳である。東南に開口する横穴式石室は両袖



橘塚古墳

型玄関付複室構造を示し、全長約16m、後室は長さ約3.8m、幅約3m、高さ約4.1m、前室は長さ3.2m、幅1.9m、高さ2.8m、羨道は長さ約7m、幅1.9m、入口の幅2.9m、高さ2.9m、入口の高さ3.5mである。綾塚古墳とともに巨石墳に属し、昭和45年（1970）国指定史跡とされた。

続いて本学所蔵の管玉、小玉、白玉の出土地である行橋市稗田地区に向った。

稗田地区は盆地の中心にありコスモス、ススキ等が咲き乱れ、富有柿がたわわに実っており、落着いた田園風景であった。本学所蔵資料の「管玉、小玉、白玉」など56点が豊後国京都郡稗田村出土と記されており、現地での出土地の確認を行なったが、大きく変貌しており、中心地の小学校、警察署の北方の台地上に遺跡があったといわれ、現在も雑木が生い繁っている場所がある。この周辺の遺跡より出土した資料と比較し、類似性は認められた。管玉は碧玉（Jaspeh）で暗緑色、不透明、貝殻状断口を示す堅硬な岩石である。小玉は蠟石（Pyrophyllite）である。調査する時間もなかったもので、中心地と思われる台地を撮影した。夕刻7時宿泊場所九州厚生



行橋稗田地区

年金会館につき第1日の日程は終了した。

第2日目の10月15日(土)は先ず隣接する「北九州市埋蔵文化財センター」を見学させていただいた。各遺跡より出土した遺物がコンテナに整理され収蔵庫の棚へ納められている。調査し発掘した資料がぼう大な量となっており、収蔵庫のスペースも限界に近づいている。そのため、統合した小学校舎へ仮に収納しているとのことであった。複元作業、製図作業等も行なわれており、また完了したものについては遺跡発掘調査報告書として発行されており、北九州考古学



鞍手町歴史民俗資料館

の発展に寄与されていることが理解できる。続いて「垣生横穴墓」を見学する。中間市大原垣生字羅漢山ほかの独立丘陵斜面に分布しており、40基が確認されている。金冠、勾玉、管玉、丸玉、鉄刀、刀子、須恵器等が検出された。県史定史跡。次に「鞍手町歴史民俗資料館」を学芸員古後憲浩氏のご案内で見学する。当館は「民俗コーナー」「通史コーナー」「伊藤常足翁コーナー」「石炭コーナー」などに分れており、鞍手町の歴史、文化が一目で理解される。見学した当日はちょうど企画展が開催されており、「懐かしの大道芸」と題し、日本人の信仰と民俗を育み、日本文化の伏流となって生き続けてきた大道芸の系譜の数々を紹介されていた。「猿まわし」「万歳」「あほだら経」「ガマの油売」「紙芝居」「バナナのせり売り」「のぞきからくり」等々。館報『ふるさと鞍手』『資料館展示図録』『なつかしの大道芸』図録、鞍手町文化財調査報告書第3集『新延大塚古墳』等の寄贈を受けた。

第3日目は最初に飯塚市歴史資料館を嶋田光一学芸員のご案内で見学する。飯塚市柏の森959



飯塚市歴史資料館



古月横穴墓

番地に設立されており延床面積2358㎡を有し、1階に王塚古墳復元模形があり、2階に常設展示室、企画展示室があり、日本の弥生文化を代表する立岩遺跡の前漢鏡10面、34号甕棺の出土状態の模型など展示されている。小規模資料館であるが充実した展示であった。常設展示は飯塚地方のくらしと文化が展示されていた。続いて「桂川天神山古墳」「王塚古墳」「珍敷塚古墳」を見学する。この古墳は嘉穂郡桂川町寿命の丘陵上に立地する前方後円墳で、前方部は削平されているが、南西に向けている。昭和40(1965)年の調査で、両袖型玄門付の単室石室であることが判明した。玄室を中心とした彩色壁画が著名である。楯、鞍、鉄刀、連続三角文が描かれ、赤一色に塗られ、その上に黄色の珠文が散在する。副葬品でも多量の遺物が見つかった。続いて「古月横穴墓」「新延太塚古墳」を見学する。引続き「竹原古墳」を見学する。竹原古墳は鞍



竹原古墳

手郡若宮町竹原の低台地に立地する円墳で、装飾古墳として著名である。石室は南西に開口する横穴式石室で、両袖型玄門附複室構造を示す。奥壁下段の1枚岩の部分と前室奥壁下段に壁画が認められる。金環、玉類、銀製中空玉、鉄刀、鈴鏃、刀子、馬具、須恵器などの福葬品があったと報告されている。6世紀後半の築造と考えられている。

「珍敷塚古墳」は浮羽郡吉井町富永の耳納山麓の扇状に立地しているが、採土などによって墳丘決削平にされ、横穴式石室も崩壊し奥壁と右側壁の最下段のみが残っている。奥壁石に赤色顔料を用いた中央に鞆を3個、藤手文を描き、左側に上部に太陽の如き同心円文を、下部には櫓を持つ人物と船、鳥がみられる。また右側には盾を持つ人物、ひき蛙などの描かれ、またそれを載せているように下部に舟を描いている。これらは葬送を示すものといわれ、古墳は6世紀後半に位置づけられる。

以上多数の古墳を見学し、調査したが、北九州地方には未だ多数の古墳が存在する。機会が



珍敷塚古墳壁画

あれば再度見学に訪れ研鑽していきたいと思う。ご案内下された前田義人主査、宇野慎敏学芸員その他の関係者には、お忙しい中特にご説明下されたことに感謝申し上げます。【角田芳昭】

考古学入門講座（第5回）について

平成6年度「考古学入門講座」は平成6年11月5日(土)13時30分より開講式が行われました。博物館長網干善教教授の挨拶に引続き講演があ

り今回は「古墳出土の遺物」とし、総括を網干善教館長が講演された。以下土曜日の14時より16時まで次の講師により講演がありました。

開 講 日	テ ー マ	講 師
11/5(土)	古墳出土の遺物	関西大学文学部 教授 網干 善教氏
11/12(土)	古墳出土の鑑鏡	奈良シルクロード博記念国際交流財団 シルクロード学研究センター研究主幹 菅谷 文則氏
11/19(土)	古墳出土の刀剣	宝塚市教育委員会 社会教育課文化財係長 直宮 憲一氏
11/26(土)	古墳出土の甲冑	御所市教育委員会 学芸員 藤田 和尊氏
12/3(土)	古墳出土の玉類	奈良県立橿原考古学研究所 主任研究員 関川 尚功氏

博物館開館一周年記念講演会について

関西大学博物館が平成6年4月1日に開館された。これを記念して「開館一周年記念講演会」

が事業局と共催し開催され多大の成果を納めました。講演者及び題目は次のとおりでした。

開 講 日	テ ー マ	講 師
5月6日(土)	インド サヘート遺跡	関西大学文学部教授 あべし 網干 よしのり 善教氏
5月13日(土)	チリ イースター遺跡	奈良国立文化財研究所 飛鳥・橿原宮跡発掘調査部長 いのくま 猪熊 かねかつ 兼勝氏
5月20日(土)	イスラエル エン・ゲヴ遺跡	天理大学附属天理参考館 学芸員 やまうち 山内 のりつぐ 紀嗣氏
5月27日(土)	イタリア ポンペイ遺跡	鳥取県埋蔵文化財センター 文化財主事 はま だ 濱田 なつひこ 竜彦氏
6月3日(土)	シリア パルミラ遺跡	奈良県立橿原考古学研究所 調査第1課 室長 さいとう 西藤 きよひで 清秀氏
6月10日(土)	インド マヘート遺跡	関西大学非常勤講師 よね だ 米田 あみたか 文孝氏
6月17日(土)	中米 マヤ文明 カミナルフユ遺跡	京都文化博物館 学芸員 みなみ 南 ひろし 博史氏
6月24日(土)	ウズベック共和国 ダルベルジンテペ遺跡	奈良県立橿原考古学研究所 調査第2課長 かめだ 亀田 ひろし 博氏

博物館実習「洋上実習」報告

昨年博物館実習における「洋上実習」が開講され、参加学生のレポートに4年間で最も印象に残った講義実習であったと記載された文章が多く見られた。よって今年度も第2回の洋上実習が開催された。

平成7年8月28日(月)～8月30日(水)〔1班〕8月30日(水)～9月1日(金)〔2班〕それぞれに分れ参加15大学、373名の参加者がありました。開西汽船「さんふらわあ号」(12,000t)の定期便を使用し、1名当り20,000円の参加費で2泊3日の行程でした。

第1日目は14時より開講式、引き続いて講義が行われ、第1講義は「学芸員35年を振り返って」と題し、市立五條文化博物館長勝部明生先生のお話と、第2講義は「文化財保存科学」について奈良県立橿原考古学研究所保存科学研究室長今津節生先生のお話がありました。夜間実習は「掛け軸の取扱い」の実習が帝塚山学院大学の高橋範子先生指導のもとに行われ、多大の成果をあげました。同様に第2班の講義は「表装・表具の歴史と取扱い」と題し、京都岡墨光

堂社長岡岡太郎先生のお話と第2講義は「企業博物館について」奈良そごう美術館長野田泰通先生の講義が行われました。夜間実習も「掛け軸の取扱い」が堺市博物館学芸員井溪明先生により行われました。

第2日目は別府市内の博物館施設を2班に分け見学し、1班は大分県立宇佐風土記の丘資料館、別府大学附属博物館、湯布院民芸村を、2班は別府大学附属博物館のかわりに、二階堂美術館を見学しました。夜間は、参加者懇親会と閉会式が行われ、学生のレポートには懇親会の印象が強烈に焼きついている記録となっていました。

第3日目は大阪港へ帰り海遊館及び各大学がそれぞれに独自の計画した博物館施設を午前中見学し、解散しました。

今年も学生に感想文とアンケートを提出させたところ、概ね好評で、「今後も引き続き実施してほしい」との要望が書かれていました。中には許されるなら再度参加したいと書いた希望者も各大学に1名はいました。〔角田芳昭〕



開講式及び講義



見学実習風景



実務実習（掛軸の取扱い方）



各大学親睦会

平成 6 年度 寄贈図書・彙報

寄 贈 者	書 名
斜里町立知床博物館	第15回特別展 峰浜のむかし・斜里町博物館要覧・知床博物館研究報告第15集・ウトロの自然と歴史(郷土学習シリーズ第14集)・北海道と知床の化石(第16回特別展)知床の人と自然(郷土学習シリーズ第17集)博物館のひろばNo51~54
北上市立博物館	国見山自然観察ガイド
河北新報社	東北学文庫3 縄文にみる東北のこころ
東北歴史資料館	東北歴史資料館研究紀要第16-17巻・第18巻
岩手県北上市立博物館	博物館だよりNo15
東北学院大学文学部史学科	東北学院大学博物館学芸員課程報第16号
秋田県立博物館	館報平成5年度・研究報告第19号・博物館ニュースNo97~98
秋田大学鉱山学部鉱業博物館	鉱業博物館第26号(平成5年度)
茨城県立歴史館	茨城県立歴史館報第21号・茨城県立歴史館蔵書目録(郷土資料2) 茨城県立歴史館蔵書目録(一般図書2)・歴史館だよりNo61~63
駒勝田文化・スポーツ振興公社文化財調査事務所	フィールドノート vol.6
勝田市埋蔵文化財調査センター	かつた埋文だより創刊号・2号
群馬県立博物館	群馬県立博物館紀要第14号・歴史博物館だよりNo54~56・58
群馬県立歴史博物館	第48回企画展 日本三古碑は語る・第49回企画展 近代群馬のあゆみ
群馬県立美術館	「群馬の森」美術館ニュースNo.7・8
穴澤 光(会津若松市)	井上コレクション 弥生・古墳時代資料図録
埼玉県立博物館	博物館だより第84~88号
埼玉県立さきたま資料館	調査研究報告第7号
埼玉県立文書館	北足立地方の文書Ⅱ一會田家文書一(平成6年度第2回収蔵文書展) 文書館紀要第7号・要覧第12号・収蔵文書目録第33集 埼玉県関係行政文書件名目録 戦中戦後期編Ⅰ・戦中戦後期編Ⅱ
駒達山記念館	遠山記念館だより第7・8号
川村学園女子大学	川村学園女子大学研究紀要第5巻第1号・第5巻第2号・図書館報「樺」第2・3号
千葉県立中央博物館	千葉県立中央博物館研究報告一人文科学一 第3巻第2号
千葉県立房総風土記の丘	千葉県立房総風土記の丘だより第27号
船橋市郷土資料館	平成5年度 船橋市郷土資料館年報・平成5年度第1回小企画展資料観覧の手びき・平成5年度第2回小企画展示資料観覧の手びき・第63回展示資料鑑賞のてびき・江戸時代の船橋周辺一藤原新田御用留による村の暮らし一・資料館だより第59~61号
和洋女子大学文化資料館	国府台4一平成4年度紀要・年報一、国府台5
駒中近東文化センター	MECCJ(メックジェイ)No.1~No.3 オリエントの美術 TREASURES OF THE ORIENT
NHK 放送博物館	博物館だよりNo39
伊能 秀明	法制史料研究1
お茶の水女子大学学芸員課程	お茶の水女子大学博物館実習報告10
憲政記念館	日本議会政治の歩み特別展 第2回展示目録一帝国議会の開設から明治末年
國學院大学博物館学研究室	博物館學紀要 第18輯
全博協事務局(國學院大学)	全博協 研究紀要一第13号一
国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館	国際基督教大学博物館 湯浅八郎記念館年報No10 1991-92・No11 1992-93 湯浅八郎記念館所蔵品にみる日本の文様「唐草」
国立歴史民俗博物館	文部省国立歴史民俗博物館要覧1994
古代オリエント博物館	BULLETIN OF THE ANCIENT ORIENT MUSEUM Vol.XIV、1993
実践女子大学	MUSEOLOGY 第13号
白梅学園短期大学	白梅学園短期大学紀要 No30
大正大学	大正大学研究紀要 第79輯
玉川学園教育博物館	博物館ニュースNo.3~6
丹青研究所・文化空間研究部	季刊ミュージアム・データNo25・26
帝京大学文学部	帝京史学第9号

寄 贈 者	書 名
東京国立博物館	博物館ニュース第570～574号
東京都美術館	平成6年度東京都美術館年報
東京家政学院生活文化博物館	暮らしの中の木の文化一削る・曲げる・組む (第6回特別展示目録)
東京都江戸東京博物館	江戸東京博物館要覧 1994・博物館ニュースNo.5～8
東京都江戸東京たてもの園	江戸東京たてもの園だよりNo.39
東京農業大学農業資料室	三葉虫化石写真集 古生代の節足動物・農業資料室展示案内No.17
八王子市郷土資料館	八王子千人同心の群像・資料館だよりNo.52・53
美術館教育研究会	美術館教育研究 vol.5、No.1～No.3
文化学園服飾博物館	博物館だより第7号
武蔵大学	学芸員課程報告第5号
武蔵野美術大学	武蔵野美術大学研究紀要 1993—No.24・1994—No.25
明治大学商品陳列館	明大商品陳列館報 (第18号)
明治大学	MUSEOLOGIST 9 (1993年度明治大学学芸員養成課程)
明治大学刑事博物館	明治大学刑事博物館年報25・内藤家文書増補・追加目録(4) 老中等奉書(3)
立教大学学芸員課程研究室	MOUSEION No.40
神奈川県立博物館	神奈川県立博物館研究報告第20号
シルクロード研究所	SILK ROAD ART AND ARCHAEOLOGY Vol.3 1993/94
東海大学	東海大学紀要課程資格教育センター 1993—No.3
横須賀市人文博物館	横須賀市博物館研究報告 (人文科学) 第38号
横須賀市自然博物館	横須賀市博物館研究報告 (自然科学) 第41号
横須賀市自然博物館 横須賀市人文博物館	横須賀市博物館報No.41・横須賀市博物館資料集第19号
新潟市郷土資料館	新潟市郷土資料館通信第75～78号
富山県立埋蔵文化財センター	古代の須恵器—新技術の伝来—平成6年度特別企画展図録 埋文とやま第44～46号
富山市郷土博物館	特別展 富山城の歴史展・富山市郷土博物館史資料集6 針山大工関係資料 五十嵐家史資料目録
(財)石川県埋蔵文化財保存協会	(財)石川県埋蔵文化財保存協会年報4
石川県立歴史博物館	石川県立歴史博物館年報第4号・石川県立歴史博物館紀要第7号 石川れきはくNo.32～34 ふくいミュージアムNo.25・26
福井県立博物館	金沢大学考古学紀要第21号
金沢大学文学部	帝京大学山梨文化財研究所研究報告集第5集・研究所だより第20・21号
帝京大学山梨文化財研究所	博物館だより「ハケ岳通信」No.11・12
茅野市の博物館	博物館だより第53・55号
岐阜県博物館	参加体験ミュージアムへの誘い—体験して学ぶ登呂村のくらしと米づくり— 参加体験ミュージアムセルフガイド 登呂村のくらしと米づくり 平成3・4年度弥生人体験クラブ活動記録 登呂の弥生人2 特別展 発掘された駿府城跡—新出土品にみる城のようすとくらし— 静岡市立登呂博物館館報4—平成5年度—
静岡市立登呂博物館	東海大学海洋科学博物館年報No.22・海のはくぶつかん第135・138～142号
東海大学海洋科学博物館	宝物館だよりNo.78～84
熱田神宮玉物館	明治村年報平成5年度
熱田博物館 明治村	愛知淑徳大学論集第19号
愛知淑徳大学	名古屋博物館研究紀要第17号・博物館だより第97～100・102号
名古屋市博物館	名古屋市見晴台考古資料館年報11・見晴台遺跡ガイドブック
名古屋市見晴台考古資料館	皇學館大學神道博物館館報第5号
皇學館大學神道博物館	「おてみち」第7号
滋賀県立安土城考古博物館	滋賀埋文ニュース第168～179号・「埋もれた文化財の話」14・15
滋賀県埋蔵文化財センター	研究紀要第12号・「瓦 BAN」第3・4・6
滋賀県立琵琶湖文化館	研究調査報告2号
琵琶湖博物館開設準備室	彦根城博物館研究紀要第5号・彦根城博物館年報平成4年度 博物館だより25～28
彦根城博物館	大本山天野山金剛寺 持国天・増長天像保存修理報告書
天野山金剛寺	

寄 贈 者	書 名
華頂短期大学	華頂博物館学研究創刊号
京都国立博物館	博物館だより第101・103～105号
京都国立近代美術館	京都国立近代美術館年報平成3年度・4年度
京都市歴史資料館	京都市歴史資料館紀要第11号
京都府京都文化博物館	祇園祭大展—山鉦名宝を中心に—
京都府立丹後郷土資料館	丹後・丹波出土の中国陶磁（特別陳列図録35）
京都市立芸術大学	名品に偲ぶ 学窓の美術家たち（大学会館竣工記念展）・京都市立芸術大学芸術資料年報1994
京都市歴史資料館	平成5年度京都市歴史資料館年報No12
京都橘女子大学	研究紀要第21号・「クロノス（時の鳥）」VOL.1
同志社大学博物館学芸員課程	博物館学年報第26号
花園大学史学会	花園史学第15号（上島有教授古稀記念号）
財大阪文化財センター	第12回近畿地方埋蔵文化財研究会資料・大阪府下埋蔵文化財研究会（第31回）資料
池田市立歴史民俗資料館	日本画家 上田耕夫・耕沖・耕甫
泉大津市教育委員会	発掘された いし つち き —ものが語る泉大津の歴史— 泉佐野の歴史と文化財第2集 泉佐野の遺跡—原始・古代篇— 「茅渟の道」第3号
泉佐野市教育委員会	一須賀古墳群資料目録Ⅰ土器編（実測図）
大阪府教育委員会	大阪誕生シリーズ第1冊 旧石器・縄文時代（大阪府文化財普及啓発資料）
大阪市公文書館	公文書公開制度運用状況（昭和63年度～平成4年度答申編） 公文書公開制度運用状況（昭和63年度～平成4年度運用状況編） 大阪市公文書館年報第6号・研究紀要第6号・「大阪あーかいぶず」第14・15号
大阪狭山市郷土資料館	特別展狭山池と重源上人・資料館だよりNo14
大阪市立自然史博物館	大阪市立自然史博物館報19・5 億年の歴史 近畿地方のおいたちをさぐる（第20回特別展展示解説書）・琵琶湖—おいたちと生物—（第21回特別展展示解説書）
大阪市立東洋陶磁美術館	友の会通信No35～37・友の会だよりNo11
大阪市立美術館	美をつくしNo141・142
大阪府立近つ飛鳥博物館	大阪府立近つ飛鳥博物館要覧・モノクロームの仏たち—新納忠之介コレクションから—シルクロードのまもり—その埋もれた記録— 博物館だより「アスカディア・古墳のもり」VOL.1
大谷女子大学	資料館だよりNo60～62
堺市博物館	堺市博物館報第13号・関西国際空港開港記念アルフォンス・ミッシェル展 海を渡った浮世絵展“アムステルダム国立博物館館蔵品を中心に”
吹田市立博物館	瓦—平安の都へ—〔平成6年度特別展〕・博物館だより第1～3号・吹田市文化財ニュースNo14・15
帝塚山学院大学	博物館学芸員課程年報第11集 平成5年度
財日本民家集落博物館	民家集落ふるさとだよりNo13
明石市立文化博物館	発掘された明石の歴史展—藤江別所遺跡—・文化博物館ニュースNo.6・8
芦屋市立美術館	「なりひら」第14号
尼崎市立歴史博物館（仮称）	準備室だよりNo.5
神戸市立博物館	博物館だよりNo.47～49
神戸女子大学	神戸女子大学紀要第27巻 文学部篇（第1分冊）・文学部篇（第2分冊）
財竹中大工道具館	竹中大工道具館収蔵品目録第6号—槌・斧・鉾・その他の道具篇— 竹中大工道具館研究紀要第6号
西宮市立郷土資料館	石在町出土銭と公智神社出土銭（文化財資料第39号） 郷土資料館ニュース第14・15号
兵庫県立近代美術館	美術館ニュースNo.91～93
兵庫県立歴史博物館	「わたりやぐら」第28・29合併号
香芝市二上山博物館	ふたかみ1—1992（平成4）年度香芝市二上山博物館年報・紀要— 再現・葛城の豪族居館を推察する（第5回特別展）
橿原市千塚資料館	かしはらの歴史をさぐる2 平成5年度埋蔵文化財発掘調査速報

〔以下次号〕

平成6年新収資料

“平成6年度において次の資料を購入した。

李白吟行図	梁 楷
裁竹図	梁 楷
郁山主図	一山一寧
闘鶏図	宮本武蔵
一挨一墨	与謝蕪村
福の神	仙崖
紅梅	尾形乾山
白梅	酒井抱一
梅にうそ	小杉放庵
こほうぎ	安田靫彦

以上の10点であり、いずれも複製資料である。博物館実習指導資料として購入したもので「資料取扱いの基礎」及び「掛軸の取り扱い方」の実技として多いに活用されている。また博物館実習の「洋上実習」にも借り出し夜間の実習資料ともなった。

「李白吟行図」は酒好きの詩人李太白が、ほろ酔いにそぞろ歩きをする姿を描いたもので、梁楷得意の減筆体による表現で、「裁竹図」も同様である。茶掛けの画として珍重されている。

また近代の絵画についても知識を取得するため、若干の絵画を購入した。



編集後記

第31号をお届け致します。博物館として一般公開されて以来、「博物館規程」「同規程細則」に則り、順調に運営され、資料、施設も徐々に充実してきております。4月1日付で新卒採用の久井幸子主事補が学芸員として配属され、庶務一般、博物館実習事務等、コンピューターを駆馳し、頑張っております。皆様のご指導よろしくお願い申し上げます。

開館一周を記念し講演会を事業局と共催で開催し好評でした。「世界考古学の発掘成果」と題し、本学卒業生が世界各地の遺跡を発掘した体験を講演して下さり、平均230名の聴講者があり熱心にメモなどをとられていました(15ページに講演者の役職氏名を収録しています)。また考古学入門講座も第5回となり「古墳出土の遺物」と題し入門講座が開催

されました。いずれも事業局との共催で会場のお世話から、司会まで引受けて下さいました。記して事業課の皆様に感謝いたします。

表紙の資料は「肩庇付冑・挂甲及び装具の附装」で故名誉教授末永雅雄先生が復原された資料であり、甲冑研究の貴重な資料として全国の研究者が調査に来訪されます。肩庇付冑は鉄菱形小札鋸留式で奈良市円照寺墓山1号墳出土品を基本に復原されたもの。挂甲は鉄小札革威胴丸形式で、岡山県天狗山古墳出土の挂甲を基本に復原されたもの。頸鎧、肩鎧は武人埴輪の表現を基本として復原され、籠手は石川県江沼郡勅使村狐山古墳出土資料を基本として復原されたものです。

〔角田芳昭〕

関西大学博物館彙報 No.31 平成7年9月30日 発行
 関西大学博物館 編集
 ナニワ印刷㈱ 印刷